
墮天使探偵事務所にようこそ

埜堵永高王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堕天使探偵事務所にようこそ

【Nコード】

N6070B

【作者名】

埜堵永高王

【あらすじ】

性悪悪魔がやって来た！迎え撃つは世界一男らしい女の子！陰険天使やら格闘バカやらその他大勢が入り乱れ大騒ぎ！一体どうなることやら

プロローグ：ご挨拶（前書き）

この物語はコメディですが自信はありません！（おい！）少しでも面白いと思われた方は良ければ感想を書いて下さい。作者が狂喜乱舞します。

プロローグ：ご挨拶

ここは、都内某所にある3階建ての廃ビル。壁には落書きと

「落書きした奴はけちゃんけちゃんにした上真つ裸逆さ吊りの刑に処する」

と書いた張り紙、ビルの入り口には

「天野探偵事務所」

と書いた、いや彫られた木の看板。私はその前に立っていた。今回この物語を立ち上げるに先立ちインタビューをする為に来ていた。

私が事務所に入ろうとした時、上から悲鳴が聞こえた

「うぎゃああああ！」

そして、中肉中背の男が吊された。

上から男が投げ落としたのだ。

男の名前は天野 宗一郎。長身で顔立ちも良いのだが言動が全てを台無しにしていた。

この物語の主人公にしてその本性は天界を追放された天使

「堕天使」

と呼ばれる悪魔である。

私は意を決してインタビューを敢行した。

私

「初めまして」

天

「んああ？誰だてめえ？」

私

「一応、作者です」

天

「何しに来やがったんだ？」

「物語の初めなんで主人公にインタビューでも……」

天

「おう、今答えられるのなら、答えてやる」

私

「では、自己紹介でも、お願いします」

天

「本名ルシフェル、天界のくだらない生活に嫌気がさし、地獄に降りたはいいが何の因果か人間界で物探しをしている。将来の夢は地獄を統一して天界に喧嘩をする事」私

「物騒な夢ですね…所で先程の吊された方は何かしたんですか？」

ル

「くだらない依頼をして来たんでな吊してやった」

私

「?…と言うと?」

ル

「男を見張れだと。口調も気に入らなかったがああ脂ぎったハゲ頭！つい吊してしまった」

そこにハリセンを持った何者かが乱入して来た。？

「つい…じゃ無いでしょうが…!!」

スッパーン！

ル

「つてえな！蘭！」

蘭と呼ばれた少女は都内某所の高校の制服を着ていた。どうやら学生らしい。顔立ち、スタイル共にいいが女性にしては高い背と濃い眉、ボニーテイルがのせいで美少女と言うよりも美人、美人と言うよりハンサムと表現した方が当たっていた。ボグウ！

鈍い音と共にルシフェルが吹っ飛び、地面に落下していく。仕方がないので

私

「蘭さん、開始記念のインタビューです。自己紹介をお願いします」
蘭

「初めまして。皆さん三輪 蘭と申します。都内某学校に通いなが

ら、この事務所の事務員として働いています。今では後悔しています。夢は映画監督ですが当面はあのクソ悪魔をシバいて改心させる事です」

私

「読者の皆様に一言お願いします」

蘭

「初めての物語ですので面白く無いかもしれませんが作者一同頑張りますので応援、感想宜しく御願います」

旨い話には裏がある。(前書き)

あんまりギャグ無いかも

旨い話には裏がある。

「だあらっしゃああ！」

ガッシャアアアン

今日も元気だハリセン唸る。

ここは東京の某所にある天野探偵事務所。

今日もここでは日常的な行動が執られていた。

「一体、何十万回言わせれば気が済むわけ！依頼人に手を出すなど何度も言ってるでしょう！」

ハリセン片手に仁王立ちしている女子高生と窓を突き破り地面に叩きつけられた男の構図は、毎日行われている事だ。

女子高生の方は、三輪 蘭。都内某学校に通う現役女子高生だが、兼業で事務所の事務員になっていた。スタイル、顔立ちは良いが長身のせいで美少女と言うよりも美人、美人と言うよりハンサムである。友人の間では『世界一男らしい女の子』である。

事務所の所長は今、アスファルトに転がっていた。名前は、天野宗一郎。顔立ち、スタイルはいいが言動のせいで全てを台無しにしていた。

「あーあ、なんであたしこんな所で働いてるんだろ？」

この言葉も毎日である。

放課後、机に頬杖して蘭は考えていた。

「うーん、どうしたものか」

この日は、就職説明会があった。蘭は映画関係の仕事に行きたかったが、専門の学校に行かなければいけないらしいが両親が他界し、お金の収入が無い為高校を卒業したら仕事をしないとイケない。

「はあ……」

「どうしたの？ため息なんてあんたらしく無いじゃない？」

振り返ると、背の低い大人しそうな女の子が立っていた。

「藍香：ほつといてよ。あたしは世の無常を噛み締めているんだから」

結城 藍香。藍の友人にして相談役、そして周囲からは、手綱役として視られていた。

「あんた、この前も同じこと言ってたわよそんなに、気になるんならバイトでもしたら？」

藍香は妥当な意見を口にするが、当人はあまり乗り気ではない様だ。「あたしにいい？あんた、今までやって来た事忘れなの？」

ジト目で睨む蘭に呻きながら藍香は思い出す。

「

「たしか、蘭が欲しい服があるからって一緒にしたんだよね」

マク。ナルドでバイトしていた時に藍香にちよっかい掛けてた不良数名をけちょんけちょんにしてパンツ一丁で近くのデパートの屋上から逆さにして泣いて

「ごめんなさい」

と言うまで吊していた逸話がある。勿論バイトはクビであったが……。そんな事をバイトの先々ですれば誰も雇いたくは無いだろう。

帰りに喫茶店で藍香と『まだ、暴れていない店』リストを作っているがあまり芳しい結果は出ていない。

「無いねえ」。蘭ったらそこかしこで暴れてるんだから」

（いや、半分はあんたのせいだし）

「はあ……実際問題、どうするかしらね？」そこに店のマスターがコーヒーを持ってきながら近づいてきた。マスターはヒゲを蓄え温和な表情が似合う50前後の男だが正確な年は知らない。

蘭がバイト捜してるんだけど、なかなか見つからなくて……」

「ふうむ、まあ蘭ちゃんの武勇伝はここいらには知れ渡っているからなあ……」

ヒゲをさすりながらマスターも考えにふける。

「……………」

「「??」」

そのポーズからピタリと動かない。

「ぐう…もう食べられない」

「寝るなあ!!」

スパアン！

「はっ！」

「もう、いい！自分で考える！」

蘭は店を飛び出した。

「はあ…とは言っても、本当どうしよう…って、ここどこ？」

どうやら知らない道に入り込んでしまったらしい。

「んっ?…こっ、これは！」

電柱に張られたチラシを手にとり、詳しくみる。『求む！バイト！時間、賃金、高待遇。仕事は簡単な事務処理のみ!』

そして、その下に大体の時給などが書かれていたが、相場の2、3倍はあった。

即座に頭の中でそろばんを叩きながら地図を見る。どうやらすぐ近くの様だ。少し考えればおかしいのは直ぐに判るはずだが時給の良さ、探し疲れがアランの思考力を根こそぎ奪っていた。

「うあ……ここ？」

ボロボロのビル。木にナイフが何かで削られた看板。本当にここなのかかなり不安だが地図ではここだった。

「帰ろっかな…」

『おや、もしかしてバイト希望かな?』

後ろから声が聞こえ振り返ると、

「君、バイト希望の子？」

白い上下一体のロープに身を包んだ好青年が立っていた。

「あつ、えつと、一応。でも、やつぱり…」

「あつそうなの！じゃあ詳しい話するから、中入って！」
そう言つて無理やり蘭を中に連れ込んだ。

『あの時、無理やり逃げてれば良かったわ』（蘭後日談）

「……つて、事で君は事務処理なんかをしてもらつんだけど…何か質問は？」

「あの、あなたが所長さんですか？」

「んっ？違うよ。所長はちよつと用事でね、変わりに僕が決めてい
いつて言われているんだ。どうだろう。君が良ければすぐ採用だけ
ど…」

（本当に、ここでいいの？スツゴい気になるんだけど）

「もし、決めてくれるんなら時給を更に二倍にするよ」
その一言が決めてだった。

『旨い話には裏がある』

放課後、蘭は天野探偵事務所に来ていた。

「ふう、緊張するな。…よし！今日から頑張るぞ！」
ガチャ

「こんにちは！今日からお世話になる三輪 蘭です！」

二話：出会いは無数の拳と共に

（初めが肝心だよな）

「こんにちは！今日からお世話になる三輪 蘭です！」

「んあ？」

元気よく挨拶をし蘭は次の瞬間、後悔の嵐にみまわれた。

事務所内の出来事を蘭の視点から見たらこうなる。

『黒ずくめのヤクザが、絶対汚職に手を染めてる政治家っぽいデブ男を半殺し…もといトドメを刺しかけていた』以上。

黒ずくめのヤクザ（長い為、黒ヤクとする）は原型が解らないほどボコボコにされた男（こちら長い為、腹黒とする）の胸ぐらを掴み片手で持ち上げる。そして、こちらを向き

「誰だ？てめえ？……………ああ、ラキが雇った奴か？待ってる。ちょいと用事を済ませるから」

そう言つて黒ヤクは再び腹黒をボコろうと向きを戻すと、

「てめえ、言い残すことはあるか？無いな？じゃあ、死ね！」

本格的にトドメを刺そうと拳を振り上げる。

「何してんのよー！！」

正気に戻った蘭は黒ヤクにドロップキックを叩き込んでトドメを刺すのを止めた。

「なにしゃがる！？」

黒ヤクはガン睨みしながら突っかかってきた。

「『なにしゃがる！』じゃあ無いわよ！あんたこそ、なにしてんのよ！？人殺しよ！犯罪よ！何考えてるのよ！？」腹黒（仮名）を指差しながら怒鳴る蘭。未だに一言も話してない腹黒（仮名）は『あう……………あう、ひぐう』などと呻き声を上げていた。

「何って、汚職まみれの政治家がクソくだらない仕事を言ってきたから、世間の怖さってやつを教えてやってるだけよ！」黒ヤク（偽名）はさも当然の様にのたまった。

プチっ

「何、下らない事抜かしてんのよう！」

その後、数十分に渡り蘭は黒ヤク（命名 三輪 蘭）をボコボコにしていた。腹黒（命名 三輪 蘭）は、蘭が折檻をしている間に逃げ出していた。

余談だが、腹黒（本名 貴嶋 兼五郎）は、後日匿名のタレ込みにより汚職がばれ政治生命に幕を下ろした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6070b/>

堕天使探偵事務所によろこそ

2010年12月28日14時10分発行